徒然草古今抄　六

特
へ 和10
2262
6

百六十三
「太衛のたの字點うり うるぶをと云る。陰陽のさもろ。相場のこと見えたり。よりちか入道や侍しハ。吉平ろり當の占文のうら(に)まてる征記。紫闌白發よあり。占うちさる術出てさやき

大衛野 筆談七云六壬天十二辰之名古人釈其義云く九月木可為枝幹故曰太衝太衝者卯月五星所出之門戸天之衝也 范曄ヵ文名表也故後漢書ニ泰の字をたとかり大学の大の字鄭玄後て泰の音とをといへと朱文公ハ音たなれハ大小の大なりと云

よりちか入道
吉平 野 安倍晴明子吉昌兄也 主計頭陰陽博士 壬午八十五卒
うらや 野 占方とも占文ともかり名目ニハせんかんと云く
裏てかきてる 野 むかしハあつき紙に書て巻なりまる所ハ紙尺をも奉文ともいふ
ヨまてたる文今のをくちけの肩半のさし
征記 愚明 犯録と云をあつめて云り

百六十四
「世の人あひあふ時。どうくも陰心あることなし。ぶ云葉あり。されど紙さくに多くハ

默止する事なし 鈔 陰心ハものいハさる體あり

世尽れ浮説【鈔】世上にいふたしかならぬ説之
あるひは又今の俗のいふ雑談するの類之

無益の縁之。世なるの浮説。

人の是非。利他のさまたげに。失おほく得まさらし。是

を語る時。たゞひとりんに。無益のするありさまをいふを妄語とぞ。

【頁六十五】あづまの人の雪あまりにまづしくありし。実にその人の吾妻にゆ

きそ方をさして。又なる山をさまられぬる。鄙客の俗を

我俗【野】我風俗之一方に属の字をそへたり
我族類あるの人

へて俗にあらしてもして

雪仏【野】貞和集子元雪佛頌一華孳出一始
味亦出事す之嗅腰開識得髑髏元是水磨
鄉宮裏函擬胎子元ハ佛光国師祖元也又雪
達磨雪布袋とあるも雪にて其像を作
るなり　又弘文濳識作雪御縫匂六出粧
成百歎王日頭出後便郎當撐眉掛眼人誰

【頁六十六】人にまずしれるなるより

人なるのいとまもあへるはさみ

恃想汝憔無熱肺腸　雪にて獅子を作りける
ことなくし　空人【撰明】堂塔佛閣をかまふ之
安置【鈔】二字ともにおくとよむ之仏をおく
ことをいふ

見るに雪の日に雪仏を作

まてそのために金銀珠玉の

かざりをいとなみ。堂塔をそんとおもるに似たり。そ

の而へをまうちてよく安置してんや。人の命ありと見るを

とて下よりきゆること雪のごとくなるらにいとなみ

まことに甚れり

あらぬ道の【鈔】我為にあらぬ之

【頁六十七】二道にふさはる人あくぬ

にの席よのがることて衰まり為なくそのかれ。かくよそれに

心にもいひおもふも思へること常のことなれどよに
わろくおぼゆるなり知らぬ道の羨しくおぼえば
うらやましなどかならはざりけんといひてありなん我
智をとり出て人にあらそふハ角あるものゝ角をかた
角あるものゝ 野 牛羊のたぐひ虎狼猪犬
のたぐひふたつながらのこと也
善にほこらず 野 論語顔淵曰願無伐善無施勞
物とあらそはず 鈔 論語子曰君子与人不争
品のたかさ 鈔 位品のたかさ也
才芸 鈔 才智芸能之
ぶけ牙あるものゝきばをかみ
いだすたぐひなり人
としてハ善にほこらず物とあらそはざるを徳とす。
他にまさることのあるハ大なる失なり品のたかさにて
も才芸のすぐれたるにても先祖のほまれにても人に
まされりと思へる人ハ。たとひ詞に出てこそいはねども。
内心にそこばくのとがあり。慎しみてこれをわするべし。
をこ 鈔 若干の罪ありとゝ
をこにもみえ 鈔 嗚呼とあり世俗にをこと
いふものなんと云義也
いひけされ 鈔 いひおさへて源氏帚木巻光源氏名のミことしくいひけされ
給ふとがおほかなるに
志常にみたずしてとあり 鈔 満なれば欠くる理なり 曲礼志不可満楽不可極
をこにも見え人にもいひけたれ禍をまねくハ
たゞこの慢心なり。一道にもまことに
長じぬる人ハみづから明に。その非をしるゆへに志つねに
みたずしてつひに物にほこることなし

一年よるさる人の事まぎれる者のありて此人の城に

は雑にかとれんすどいわるゝ也。老のかざとまでいわるゝも

老のうこうど 愚明 方人と云り
すゝれる所ありては 鈔 一生を在をもて
もちて保ちあらへあすわつてるれ之
今ハ日もされ 愚明 あさ時すうちゆれ今ハ
わゝれさらと云べきとく
大方ハ去りうり 愚明 たとへ知る事ゑて
むそさうにのひちゝれハ能才にハあらくに
ハせ物終にもころよ見るとあり

いうづゝきゝぬ。さいあれとぞ

生もまどれる和のちきい

一生ばかりてられなぐりと

ばらうて見ゆ。今ハワすれにそりといひてあさらん大方ハ

あつくりともずろよひちゝれハざべり乃才にハあら

ぬよやときこえ。そのつゝあやまりもありぬべしさ

うかも。ちきまゝ人去ゝずるとひひゐるハ我まどれ道

のあるともおもしぬべし。おそてもてぬとぞ去うり

うかにおとあくもどれぬべくもあるぬ人のひきう

するをさのあるかゝし思ひかう。きてぬるべきとまみ。

式 愚明 式作法の義之
後嵯峨院 鈔 人皇八十七代之土御門才二皇子
建礼門院 鈔 高倉院の女院永子之平清盛
女之

何かの式といふとは後嵯峨

右京大夫 野 藤原伊行女之三位中将平資盛之
人を通せし人之建礼門院の官女之右京太
夫家集云かうゝかゝ雅よりかゝ労をよう
あるき折よ思ひようみかれたくんかよう
のいのちのあるゝてだみもいとしゝきま
まして人よちるべき事といかあそても思
さかしをきる人くさらうていひそうら
ことそて思ひの外にとしへてのちまさて九き

乃在代すてハさうる

をさき程よりいふ詞なら

ど人の中絶し。建礼門院の

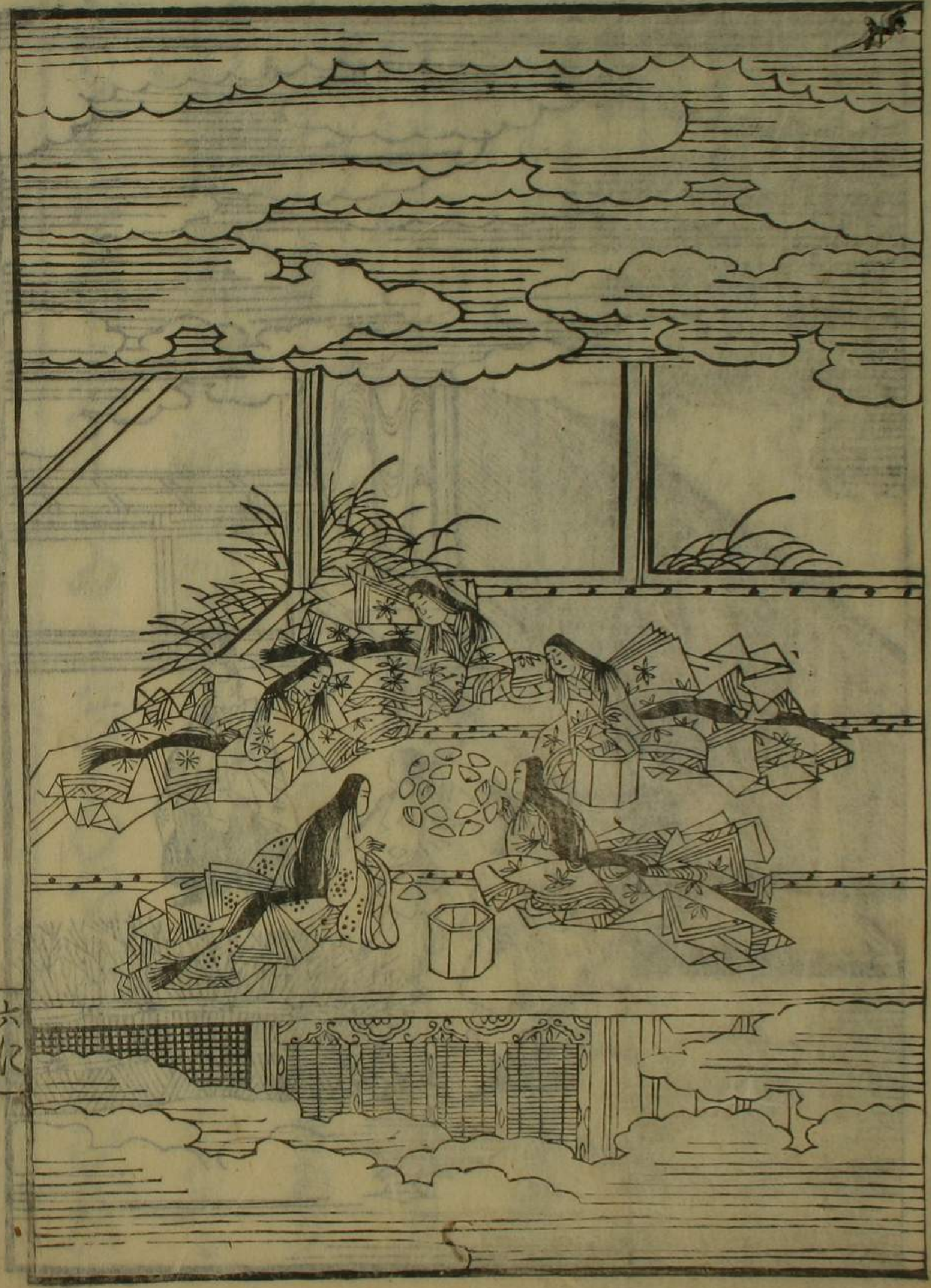
右京大夫後鳥羽院の御位のはゞからずしてうることをいかで世の武士かたちらしむることはすきゆりとられさるさしてるうそて人のうらゆくへなきおもへのありてさうりともそとをそてあいとくるへしゑしくるゝもむかしへとむかひ

あ中ごとし方れ数あて御さあすくまくんのおちも法をかくもそろりし筏つゞのくさ画あとみるかも昔すこられしそのこゝ出るらまそくるりたる子御志つらひもたゞ我心のうちんかわらけ申さるゆゑし月の六學きなきあめておほとぬ事もなくうきらうさる昔よりあるゝう人へ合すくうそうしをそもろきさ上主べきすそてみまあかもとそれあるましなくぞあるまじきと思ひつづけらまそてあかしよかも去年そんの中はやくんさもなくろ丹れて何よらはにんたるその波の御第文まいてくように御いせさせおりましろう上のみさまみもうどもみぬんのうらひとりたしがくききしうく無く月をて○今いたゞ志弁てみすくいろへと思ひのそまとすゝめる月の鄕

百十八

そしろまゐすくて 愚明 さらて用ちとかまてもちれ月のて去んく人のうら 鈔 人の許ちり 野 論語子游曰有澹臺滅明者行不由徑非公事未嘗至於偃之室也

これハ親族もてひきんもちつかうしば万乃
とありて時をうつせばがひのさあ益うしぢとかし
げばいそんもまろしんつぎあれとあらん招ハ中くをも
さゆうて愚明障くさまうけを旅客く
たりひのため愚明亭主と客人との義く
よしをもいひてれすしんに
いとりけよ愚明いとあまく客のえるまで
ろよ亭主帯外てあまくたまうる羽流
むつハまかりくせりんへのつ
くひとるもまろしとく
んつきるさことあるんお(招)ハ中くをのよし
ともいひてん愚明亭主に用あつよ客の
ん付とある
きくまてぞまちぞゆるしぞよ
八
おもんもよむかハまかりく鈔我と志同き
友の来りて深よかうすくさむまと云
ん勢にもどいそんハぱしりぎら
阮籍がまきき眼鈔竹林七賢の内く怒時ハ
白き眼をつかひ悦ときハ青眼をあらハく
よいあらざるへし阮籍の青
晋書阮籍字ハ嗣宗不拘礼教能為青白眼
見礼俗之士以白眼對之及嵇喜来弔籍作白眼喜不懌
而退喜弟康聞之乃齎酒挾琴造焉籍
一



阮籍乃見青眼。由是礼法之士疾之若讎。籍時率意独駕不由径路車迹所窮輙慟哭而反。

眼。誰もあるへきことなり。

その事とするによ人のきそのやうに【鈔】是ハ人のもとへゆきて用をかなへんとおもはゞあるへきなれば。人の来りて。

れなきにさしたる用もなくて来たる人の事也。文にも久しくきこえさせねバなといふこと見えたり。

のとかに物語して帰りぬる。

文祖を思ひうれしき事也【鈔】何の用事もなくて久しく見まほしかりつるよし計いひおこせたる

やさしく

いとよし。又文も久しくきこえ

きこえさせぬ程の事をいひおこせたる人のなさけ。わがつれ〳〵をとふらひ給ふ心ざしの有かたきなり

くとて後見分てよせたるよし。

てとかくすきまなき事を見てかくこそかきはなれ。一段の。物語

すさまじ。此一段ハ其物の知識を見分て別段とする。慢心惰気をも別段とせり

させねハなとはかりいひおこせたる

こせたる。いとうれし

貝をおほふ【野】貝おほひの事なるべし

貝をおほふ人の。我前なるを

ハおきてよそを見わたして。人の袖のかけ。ひざの下まで。

目をくばる間に。前なるをバ人におほはれぬ。よくおほふ

人ハよそまでわりなくとるとハ見えずして。ちかきばかり

おほふやうなれど。多くおほふなり。碁盤のすみに石

碁盤の角に石をたてゝ【野】後漢書梁冀伝。冀能挽満弾棊。注。挽満猶引強也。芸経曰。弾棊両人対局。白黒棊各六枚。先列棊相当。更先弾也。其局以石為之。事文類聚前集云。魏文帝善弾棊。能用手巾角。時有一書生又能低頭以所冠葛巾角撇棊。

をたてゝはじくに。むかひなる石をまぼりてはじくハ

あたらず。わが手もとをよく見て。こゝなるひじりめを

すぐにはじけバ。たてたる石かならずあたる。

ひじりめ【鈔】ひしこく

万の事外にむきて【野】貝をおほひの石をはじくにたとへて。よそをもとめず己を正しくせよとなり。

もとむへからず。たゞこゝもとをたゞしくすべし

ことしくもとむれバ。後ハ己を正しく

して分をまもるへし。これ中庸に曰。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。

清献公か詞【鈔】言行録後集五。趙抃清献公。字ハ閲道。衢州人。挙進士。事仁宗英宗神宗。官至参政。抃貌清逸。人不見其喜慍。自

為知非子為侍御史彈劾不避貴勢京師号為鐵面御史 野 皇朝類苑三十六云御瀛王詩雖浅近而多義理曰窮達皆由命何労発嘆声但知行好事莫要問前程冬去氷須泮春来草自生請君観此理天道甚分明

石ぶあつかのつるぶ外よむ

をそ求へつべし只こゝろと

遠國必ずしく 野 論語遠人不服則修文徳以来之既来之則安之 注内治修然後遠人服有不服則修徳以来之亦不当勤兵於遠

をたくしま下清献公の

風にあたり 鈔 本草序云真誥曰常不能慎事上者自致百病之本而怨咎於神霊乎當風臥湿反責他人於失覆皆痴人也夫慎事上者謂挙動之事必皆慎思云々

詞よ好るみを移じておほ経

をきふとるゝれといふ。世

掛たもさん及てよろくや得ん。うちを恐てしませがらく

列ちまゝにてみそりる。まへ遠國かるすそろむく

時ぶえじめてえろりとを求む。風にあたり。湿ふみて。

瘠を菲果よくしらふるを。過ちある人ありさ醫よよ。

いろりとし。目のおもる人の悲をやめ恵をれど

手化 鈔 徳化々 思明 遠國をむくとゑよあ

さらでくあまりて化くとぞくさきれてとこ

まそとのしうきらるゝくへゆくへきこ。こし。唇そをでしくせば。

禹のゆるて 鈔 書大禹謨帝曰咨禹惟時有苗弗率汝徂征禹乃会群后誓于師

有苗弗率汝徂征禹乃会群后三旬苗民逆命益曰惟徳動天無遠弗届禹拝昌言班師振旅帝乃誕敷文徳舞干羽于両階七旬有苗格

をも化さくるげまんてと

蔡氏傳云三苗國名在江南荊揚之間恃険為乱者也

なをちしさるゝ。禹のゆきき

よりぬ時は 鈔 論語曰君子有三戒少之時血気未定戒之在色及其壮也血気方剛戒之在闘及其老也血気既衰戒之在得

て三苗を征せしも軍をたゝく

情欲 鈔 七情六欲

そもけやきさし事 思明 ものそけやをとして徳をおくにへおうざらき

き徐く

おとえしらゑる 鈔 韻府張九齢議論 百七十二

美麗如抜走免

をこのまて 野 戦国の諸公子の門

よりぬ時へ。血氣同よあまり。

容をあつめて珠履をきるもの瑇瑁を簪とし唐の少年の狨鞍白馬千金駿骨を買の類へ

苔のたもと 鈔 隠遁の体く 野 遍昭云二 みな人へ花の衣よなりぬなり苔のたもとよかわきだにせよ 若盛ざかり年十八にて人の翁をおびしまゝを殺し うつひとらんと貪欲あやまりて女の頸をきらり大は殺さるゝのしゝて出し 翁て名を文覚とつけたる類く 恩明 人の身めよふきあとより恥らしやゑとえらてそれをうらやむやうる義なり

ん抛ようぐれて情欲おかし。才をあやぶみてぐさけやまきさり。珠をちらしさむるま俤らり。美麗をこのみて。窮をつゐやし。是を捨く

苔の袂にやつし。いさめる心さらになくて。抛とあるものはかまれ恥らしやとこのむ所。目くにさまざまじ。色はふなり。情にめて行をいさむれよ

めて 恩明 愛する体く 行をいさむれよくして 鈔 行跡く 百年の身 野 白氏文集才四新樂府井底

引銀瓶云為君一日恩誤妾百年身 恩明 人生へもろき世くれ語らいのもとにて 鈔 年よりそへ気血淡薄にして精神衰耗する事也

語らして百年乃身をあやうし。命をうしなふためし称らりて身のあまくえしかるん事をえふゝをすけるくるまんひきそぶつれ世語ともなる身をあやまつとれけつき時の志まさかる老めるへ人ハ精神おとろへおりくきろうかつ恋ひ動くゐかし。心をのつらし静されば益の身さかりさせしせて身をたもせけて世るくへの身つらひ

小野小町 野 古今序小野小町ハいにしへの衣通姫の流くありれなるやうてはよわよはたかうらんやうなるをやめる所あつまよ例

ひらけるよりかゝぬハなきの云うれハ歟へし
○中院雅作親房云今案通小野小町ノ事
不分明仁明天皇承和の比の人出羽國郡司
ガ女國色無双の人也或説ニ弘法大師の後
らしめ給ふ玉造と云抄ありこれハ玉造の
小町と云者昔ハ美形なりしがやうやう
衰たる事を詳に書たりしめ給へる
然而小野玉造を姓各別のと他人なりと
云り不審の事也もとより沈倫して與
外の方にて今案大疑の実説ハ下向の時
まふ首の目の穴より薄の生たりしを
見てとりの外にてよくもまへ小町思ひ
給ぬ是ハ業平を慈てまめりましてたまつるり
云ハ大江惟章ノ妻も歟し時んかりして
業平の朝臣に教ぬ頃又あり其ひぬ
其の云ハ文屋康秀三河掾ニ下ル時具して
しと云はのもりて云名抄ニ文業平卿あき
をそきむとてこよりかり給ふ家就之
とかんと歟歟ようせてあつけのうてへりなる
みちのくにいりてやそ卿と云所にとりかゝり来り
野中に有の上句を詠ずるに忽あり秋風の吹
につけてもあなめあなめとハいはしけれて
よ思を成りて是と哀にて定に人まり
のかんへ一ありある歌れ是を見るよかのごくろ

わかき時にまされる事。わか
くして形の老たる方に勝るがごとし

百七十三
小野小町がこと。極めてさだ
かならず。衰へたるさまハ
玉造といふ文に見えたり。此
文清行が書りといふ説あ
れど。高野の大師の御作
の目録に入れり。大師ハ承

此目の穴より薄一本生たりける風のふきなびく
をとのかくきこえけれハあやしくてあたりの人に
此事を問或人語て云小野小町此国に下て此
所にて食を得ぬ別に頭是なと云あくに業平
哀にかなしくて淚を掬て下ノ句を付たり
小町とハいはじすゝき生たりとぞ付ける
其聖をハ玉造の小野と云ならしそ侍る
玉造の小野と小野小町と同人なるを歟り
とくにおかつるにとよりてあやそひ侍り時
人のかたり侍し　古今十二恋歌もてふた
き人のまぎゝる目真静法師の歌さしまそ
いろかたちを云葉をあげてよりて小野の小町かも
とまつらハせりける安倍清行朝臣
袖にたまらぬ白玉ハ人を見ぬめの涙なりけり
返し　小町　おろかなる涙ぞ袖に玉ハなす
我ハせきあへずたきつ瀬なれハ　顕昭古今
抄ニ真静善祐法師ト有善祐寂通二條
石清水者也云々是彩後之
玉造と云ふ【野】玉造小町子壮衰書云予行路之
次歩道之間徑邊途傍有一女人容貌憔悴身体
疲瘦云々予問女曰汝何郷人誰家之子有父母哉
無子孫乎女答曰吾是倡家之子良室之女也
壮時憍慢最甚衰時愁歎猶深云々文繁故略
考清行【野】安倍清行ハ三善清行と疑事也

和のはじめにかくれ給へり。
小町が盛なる事。其後
の事にや。猶おぼつかなし。

百七十四
小鷹によき犬。大鷹につか
ひぬれバ。小鷹にわろく成
といふ。大につき小をすつる
理まことにしかなり。人事お
ほかる中に。道をたのしむよ

一善法にあるべきか世に善相公と云これなり
御作の文も文章とも多く本朝文粋
よの中にて奇遊の達者也寛平延喜の比の人
書写大師略弘法大師也大師附法伝并元亨
釈書等に不詳 此段小町弘法時代前後の
事をいはゞ弘法ハ仁明天皇承和二年三月廿
一日入定年六十二又玉造の著述三教指帰秘
府論性霊集秘蔵宝鑰等の書とも多くあり享随
玉造の文も大師の作なりと見え悪好の云こく享徳
年中に御門跡成りしか玉造の跋にも大師の御作也と
云り今真言家へ是れハ御作の目録にのせぬとく
いふ意好にて見るなれの目録のおほかりぬるや又
玉造に楽天が秦中吟の詩を学くとあり白氏文
集第二に秦中吟弘ハ長安にて貞元元和の名作
とありこあり大師入唐ハ貞元二十年にあたれり
楽天の死去ハ大中元年日なの承和十四年にあたり
まり大師入定より十二年後也秦中吟を学びて
て玉造を作るといふも大師よりのちにあまりれ
まりかく云て伝ふるもよ玉造の文大師の筆力よ
りハ弱くかなりけるや清ん喜撰法師と小町
同時なるやうに古今集にみえりまた喜撰ハ弘法の
弟子にて弘法入定より廿六年中に貞観二年
死去せり又小町が見ひ侍くのあハ業平にて
てはかりしも業平ハ元慶四年五十六にて卒

百七十五

里あ味かりれはすぐにし是実(まこと)
のあるべでひたを受て。
これまでろさん人はつま
乃まさりすまれさんばう
をりいそあまん画なる人と
いふ見ぐりしこれ名のかいあり
あもしんや
世まいんぬるあとのお旨きこ。

大師入定の時業平ハ十歳之小町いまんぞ十
異本の入定悠暮ぜんやされハ小町がはうくさゝるとも
あるましハ大師より服するへきことも玉造の著を
見るに小野仙窟の体に似たるにあらず此婦人の
義叢歎嫉をのべて婉転艶えて気の動人の詩によ
く似たるは玉造にハ毘盧行をも似たる素まゝ人間の
盆嚢を悟りて仏道に帰するを入るべし不空大師の
先公法海財九相の詩のみにも似たる此文修行の
たくに文いて善相公ちかしハそへ文章相似たるやう
にさて作る此人ハ儒者の風ありて延喜帝へ奉り
意見封事にハ仏法ハ世教国政の為にあしかんと
きまなとのさまざまにされきたまはの文詞語眼
辞まてくも仏法を結尾にしかられさそ
安倍清行が文とい(ん)とも又文章家の一文長明が
言語有にも玉造の小町として内の人の書かりを
いへと毅然のやうなくも玉造も小野も皆妹氏女
まハ小町と云名ハ多く同じくとも玉造小町と
小野小町とハ別人まて見のきこや文奥列まてあるき
髑髏の目ようりち付の生ひ分に見るるを本言
抄にハ業平へこうひ来原ありにハ賓方くと云
これしも不祥之
小町はようきき大略 申記蕭相国世家高帝相曰美儀
追殺鰥寡者狗也而発縦指示獣処者人也今
諸君徒能得走獣耳功狗也至於蕭何発縦

ぞもあることにはぴまり酒代(さけ)
すゝめてさるのませてるを
奥とまうとひるまゆへせ
んぬぞのむ人乃かけとえ
くるけよ眉(まゆ)をひそめ人めを
そろりしまそんとし、おそんを
するをとゝへてひきとゝめて
そてろよのませつまいかる

指示功人也　史記李斯臨刑謂子曰吾欲与若復牽黄犬倶出上蔡東門逐狡兎豈可得乎　楽府左牽黄右擎蒼しき人もたちまちに狂人
道をたのむより 鈔 孔子曰朝聞道夕死可とハ簡要し万物ハ無の様く此道を会得してハとなりてをこがましく息災
他事をい捨べしと云事也
友あることにて 愚明 友の来る時も
志井のまぜ 野 孟子離婁上是猶悪酔而強酒なる人も目のまへに大事の
をそろ 愚明 正座と井捨ぞと正座のまれ
よこ云の如く
うるはしき人も忽に狂人となりて 野 前漢書病者となりて前後も知
盖寛饒賀許伯入第曰無多酌我我乃酒狂 丞相魏侯笑曰次公醒而狂何必酒也
又酒の異名を狂薬といふなり
らずたふれふす。いはふべき日など
いはふべき日 愚明 五節句朔日廿八日などの事也
あくる日まで頭いたく 鈔 宿酲のさめざるをいふハあさましかりぬべし。あく
荘子任酲三日不已 野 晋書劉伶曰天生劉伶以酒為名一飲一石五斗解酲 說文酲病酒也
をこがまし 愚明 嗚呼之
生をへだてたる 鈔 死たる様に似たるなり
る日まで頭いたく物くはずによひふし
隔生即忘
おほやけ 鈔 公私之天事 おほやけとと後酔ふし生をへだてたるやう

にして昨日の事おぼえず。おほやけわたくしの大事をかきて
わづらひとなる。人をしてかゝるめをみする事。慈悲もなく
礼義にもそむけり。かくからきめにあひたらん人。ねたく
からきめ 鈔 辛労なるめなり
ねたく口をし 愚明 酒をすゝめたるものをねたむべしとなり 口をしと思はざらんや。人の国に
人の国 鈔 異国之 愚明 異国に酒をのませ酔する狂事ありて此方になき事なり かゝるならひあなりと。これらに
伝ききてもあやしくおもひぬべしとおもひてあやしみもせぬなり になき事にて伝へききて
あまり 鈔 あまりに たらんは。あやしくふしぎにおぼえぬべし。人のうへにて見るだに
こゝろうし。思ひ入たるさまに心にくしと見し人も。思ふ

心にくしとみゆる人も思ふ所なく [愚明] 一向に
心つよき人もおりふしハまたかゝる人も酔ハ
てハ思ひつきなき事にあふらむことゝ
ひもとく [野] 帯 おひときひらけの事
まなこゆかみ [鈔] をぢざる事 着明

わらひのゝしり。詞おほく烏帽子ゆがみ。ひも
はづしはぎたかくかゝげて。よういなき　気色(けしき)。日比の人
ともおぼえず。女ハ額髪(ひたひがみ)はれらかにかきやり。まばゆからず
顔うちさゝげてうちわらひ盃(さかづき)もてる手にとりつき。よから
ぬ人ハ肴とりて口にさしあて。自もくひたるさまあし。声の
かぎり出して各(おのおの)うたひ舞(まひ)。年老(おい)たる法師召出されてくろ
くきたなき身を肩(かた)ぬぎて。目もあてられずすぢりたる

我身いみじきこと [野] 我身をよしとほこりて
かむること [鈔] 我身をまんしたる事なり
ハ言語ハ通する詞とていますこれある様な
ぐさくうるいくつ [鈔] おりしく聞かさる事也
多ひおきし [鈔] 万葉かしうことくいふりのよ
まも酒のうそそえいへたれはするぞなして
あらましたゞ人のそてりとはするハ酒のうゑ
てえひあるきするよるのをまたすと　原氏
まくらかにえひあるきさてそ
のりあひいさかひて [鈔] 罵詈 喧嘩 はなる事也
白楽天酔吟先生伝云莫怪近来都不飲幾迴因酔却沾巾諳料平生狂酒客如今変作酒悲人

を聞しらる人さへうとましく
みえて。あるひハ又我身いみじき
事どもかたはらいたくいひ
きかせ。あるひハ酔(ゑい)なきし。下さ
まの人ハのりあひいさかひあふ。浅(あさ)ましくおそろし。恥(はぢ)がましく
心うきことのみありて。はてハゆるさぬ物どもおしとりて。
縁(えん)よりおち。馬車よりおちてあやまちしつ。物にものら
ぬきハ。大路(おほぢ)をよろぼひゆきて。ついぢ。門の下など

ついひぢ 野 築地なり
えもいはぬ事 野 出家までハ兆吐する類くはむきて。えもいはぬ事ども
しちらし年老けさかける法師の小童の肩をおさ
へてきこえぬ事どもいひつゝよろめきたる。いとかはゆし。
かゝる事をしても此世も後の世も益あるべき
わざならばいかゞはせん。此世にはあやまち多く財をうしなひ
病をまうく。百薬の長とはいへど万の病は酒よりこそお

百薬の長 鈔 前漢書食貨志曰塩ハ食肴之將酒ハ百薬之長也

憂を忘るとハ 鈔 酒の異名を忘憂と云 野 東方朔伝ニ銷憂者莫若酒古楽府何以忘憂唯有杜康 杜康善造酒故為酒名

これ。憂忘るといへど酔
る人ぞすぎにしうさをもおも
るかくうさなれども 野 詩云憂心如酔又云憂心如醒

後の世ハ 野 上ハ此世にいとひ多く後の世いと
云今生殺生酒をのめであしきとく
往生礼讃云恒以瞋恚毒害火焚燒智恵慈
善根ヲ
万の戒を破りて 野 飲酒戒を破ることハ自餘の
戒を兼て破るなり 大蔵一覧第三云毘婆沙論
云有鄔波索迦稟性仁賢益又持五戒専精不犯
後於一時為渇所逼見器中有酒如水遂取飲之
之不爾時便犯飲酒戒時有隣鷄来入其舎盗殺
而噉復犯殺与盗戒隣家女尋鷄来入其室強逼
交通復犯邪行戒隣家告官官詰問拒諱復犯
妄語戒如是五戒皆由酒犯佛告諸比丘従今若
称佛為師者自今已往下至茅端所沽酒滴
亦不得飲 同第四云諸経要集云長老莎伽陀
能降悪竜偶因施主持酒与飲酔倒在地無所覚
知佛与阿難行到見之知而故問是誰耶阿難
答言降竜長老莎伽陀佛言蝦蟆今尚不能降
争大竜耶佛歎曰聖人飲酒尚有此失何況凡
夫 又云如来未曽有経同飲酒不殊向経曰食肉
等許乃佛初成道時量衆生機不可頓断漸
制所以漸制後知衆生根熟便乃永断永制
毫毛不許 酒有三十五失般若論云佛告難提
酒有多過一者財二多病三争訟四無恥五悪名六
少智七所得不得八自説隠事九作事不成十愁本

ひ出てなくめる。後の世ハ人の
智恵をうしなひ善根を
焼くこと火のごとくして悪を
まし万の戒を破りて地獄
に堕べし。酒をとりて人にの
ませたる人五百生が間手
なきものに生るとこそ仏ハ
説給ふなれ。かくうとましと

十ガ少十二巫壊十三不敬父十四不敬母十五不敬沙
門十六不敬婆羅門十七不敬叔伯十八不敬佛十九
不敬法二十不敬僧二十一友悪人二十二慢善人二十三
破戒二十四無慚愧二十五不守六情二十六縦色二十
七人憎二十八親嫌二十九行不善三十捨善三十一
不任用三十二不涅槃三十三狂因三十四悪道三
十五意不能脩恵也　此事大然一説之才四も
あり文少異之

酒をとりて人に飲しむる人 野 梵網経心地法門
品云是酒起罪因縁而若菩薩進生一切衆生明
達之恵而反更生衆生顛倒之心是菩薩波羅
夷罪又云若佛子故飲酒而生酒過失無量若
自身手過酒器与人飲酒者五百世無手何况自
飲不得教一切人飲及一切衆生飲酒况自飲酒
若故自飲教人飲者犯軽垢罪　孟子離婁下
禹悪旨酒而好善言 注戦国策曰儀狄作酒
禹飲而甘之曰後世必有以酒亡其国者遂疏儀
狄而絶旨酒

かくうとまれしとふ拘されど 野 色よりは
けて朝ばとまるなあり今合せて一順
とは色よりよそは飲酒のあきらにて
いひ色よりして飲酒のよれよりも
月の夜雪の名花の本 野 陳鴻長恨歌傳
驪山雪夜上陽花朝　李白月下独酌詩

ふ拘されど。そのつゝ捨
うるおりも天下。月乃
夜雪のあした花のもとに
てもこゝろよく拘りて盃
出しう万の興をそふるは
さへつまりくする日。思ひの外
に友の入きそどりおとなひ
るもんすゝむ。されば

花間一壺酒独酌無相親挙盃邀明月対影成
三人又楊巨源月下傳盃詩　鶴林玉露にみえて
うら　謝恵連雪賦梁王遊於兎園乃置旨
酒命賓友天宝遺事王元宝毎大雪掃雪開
径迎客飲宴謂之暖寒会李白宴桃李園
序開瓊筵以坐花飛羽觴而酔月　白楽天
詩花下忘帰因美景樽前勧酔是春風
さまくありぬあまりの流れ筆の中より 野 唐
又粟田真人か唐國に入て則天皇后にまみえて
麟徳殿に宴をたまふことあり又宋史にも載
宣仁皇后の御前にありしことありとやうの事
思ひおぬ 鈔 御酒 日本紀 酒同 或ハ神酒 説林を
祭時酒を供ふる故に神の字をみとよむ也
以河海よりて又三寸とも手酒を飲たり
る人邪風を去る三寸と云よりそれとあり
すの字をきとよむ事ハるのすの字もよむ
く 非酒 祭時 如此書之
火にて拘るより 野 宋壷山夜雪詩 架大三盃酒
流さるゝ何ら 野 催馬楽に我家ハとちく帳
進紀山陰 有戴逵
をもたてられ大君きませむこにせん
さかなやうたよろんありひさきへきらかせよ
之ん

ぬあまりにみ出の酒もち。
流て拘みきるとぞよきやう
唐さするけてひして播出されさ
るぞいとよし。今せそれ雨よ
て。火て拘りまとして。
へそてすきどちさしむかひ
て。多くのこゝろいとおかし。
旅のうら屋野山すまゐそ。

はさらに何かなくはひく。芝のうへそのころもむしろ
いたはらむ人のおもはれくすてのこゝろもいとよし。
よそ人のとりまきて。男ひとりさしまねきすその
座のせなる事まうまで。逆つ盃かりよ人のよごそ
ひくとあれあるみな逆し　さいへとよ戸れたりしく
飛ゆるさてもの酔ふさ　ひきそてあさいきる衣紗
あるはひきあけゐるにすと。ひくかれるうかなりう

ちらつ盃かりき人の【野】廬山三咲竹林七賢
飲中八仙の数のこと
さいへと【鈔】上戸を引てく

かう紀もとわさし出し。

はきゆうさらて【野】張安世ハ郎宮の軿て
殿上よゆをりきてるをゆるし丙吉ハ傳
吏の酔て丞相の車上に吐を酔飽の失を
以て士をまつへしと云てつとせさそ漢
書にあり酔人をハ五盃譏と云あきとも
世教のさためハ大飲を飛むへき事を
あさいきてる【鈔】あさねきてるを
ひきあけゐる【鈔】弁隣子あけてゐるを
ひきまろひて【鈔】きゐりのまときるをも
すくひきつるもてゆくを

抱ときあへぞいて紀もち
ひきあらひくふろかへとわ
もてあそしろ毛ひさ
るかそ紀の才とたりしく
はきくし

萬戸外【鈔】律淨殺のゆよある瀧口戸の西【百二十六】ころど
小松帝門【野】光孝天皇号ハ小松天皇仁明第二皇
子元慶八年二月即位時歳五十四仁和三年崩
年五十七
萬戸ハ小松法門位よつる務
たゝへよおりしよし時【野】未即位の時く
まさなど【鈔】無甚事て今时の料理なとして
少合数あるへし
給て昔たく人よおりまし
滝新二年【野】二月十八日百官各薪を献して文武内竪
よ織女ハ天武帝の時より始て浄薪と名つく
時浄さまるせき務給しを

半延喜式公事根源等にあまたみえても
義をそれハ只小松帝の位につかせ給ひし時
まづ子日のあそびたまひし給ふ事勘例之

古事したまひて常にいとま
まぜ給ふものかみの御木に
よそけられしが黒戸といふ所を

鎌倉中書王【鈔】後嵯峨院第一の皇子宗尊親王
立五品中務卿征夷大将軍に任せられ鎌倉に下り給ふ
将軍にて成給ふ中書ハ中務の唐名王ハ親王之
佐々木隠岐入道【野】東鑑四十建長二年十二月廿
九日隠岐太郎左衛門入道心願者佐々木隠岐前
司義清嫡男也近習出家遁世訖是
与若狭前司泰村争論於着座之事而及
喧嘩故今及此云々
梁の江州【野】晋書陶侃嘗造船其木屑竹頭
皆令籍而掌之其後元會大雪始晴聽事前
猶濕於是以所掌木屑布地及桓温伐蜀
侃詩曰致功中原亦無事弃頭木屑是功名

鎌倉中書王にて御まりありて
後はまさにのこりけれはくせんと
の給ひけれは佐々木隠岐
入道のこぎりくづを車につみて
おほくたてまつりたりけれは

一庭にしかれてさはりなく泥土のわづらひなかり
用意ありがたしと人感じあへりけりと
吉田中納言【鈔】藤房卿 万里小路を吉田とも
いふなり【愚明】吉田の中納言にあるまじきもの
の云ひしと云ふ人もありけれは佐々木入道
故実をしらぬ人にあるまじき
やうなるをのこのひさしくつかうまつりし
とひたる者のこぎりのくづといやしくきたなし
をなみせる人がけするそ

内侍所の御神楽【鈔】と其こよひとなり
寳剣【鈔】御神楽あるべき時内侍所へ行幸
あるを附そへたてまつる御剱ハ晝の御座の御
剣にて
或所のさふらひとも内侍所の御

鍬くう毛をあろもして寳剱うと云ハあやまり又寳剱ハ三種の神器の随一ひの御座ハ清凉殿なり

別殿 野 内侍所を指すなり

典侍 野 内侍司の尚侍二人典侍四人尚侍四人あり供奉奏請宣傳の事を司る禁秘抄云典侍の職尤重為之人者諸大夫女叙之事云く

とハ常に夜御殿の御帳中御枕のよはに宝剱と神璽をおかる事也中宗の乱より宝剱入海の後は清凉殿の御剱を用らる是昼御座の御剱也

浪称采をなんて人よろる
とて寳剱をハそく人そ捐
婦へるまとのふをきくて内
ある女房のきらふ別殿の
行幸にハ昼御座の御剱
にいひそうしんふくうり事

入宋 野 支那へ渡るに唐の世なれハ入唐と云宋の世なれハ入宋と云

道眼上人 野 道元とも云人あれと別人なるへし道元ハ越前永平寺の開山にて日本曹洞宗の始祖也道元ハ建長五年八月死す前代の人也道眼ハ兼好同時

記しるき典侍なるとゑや
入宋の沙門道眼上人一切
經を持来して六波羅の

百七十九

くさ草子の末よ兼好所蔵の蘭陀なれ紛て道眼の談儀をなせしとあり

一切經 野 大蔵經は五千餘巻と七千餘巻との二種あり

首楞嚴經 野 十巻あり大仏頂如来密因修證了義諸菩薩万行首楞嚴經と題せり略して首楞嚴經と云涅槃云首楞嚴者名一切事竟嚴者名堅即一切事究竟堅固也得此三昧觀法如幻於法自在云く唐則天神竜元年中天竺沙門般剌密帝於廣州制止道場譯正諫大夫房融筆授烏長國沙門弥伽釋迦譯語又長水

那蘭陀寺 鈔 楞嚴經を中印度那蘭陀大道場經ともいふ釈云那爛陀此云施無厭即龍名也池中有龍名施無厭寺近彼池故以標號

林惟則も會解を撰述し懐に是れを釈する又師子

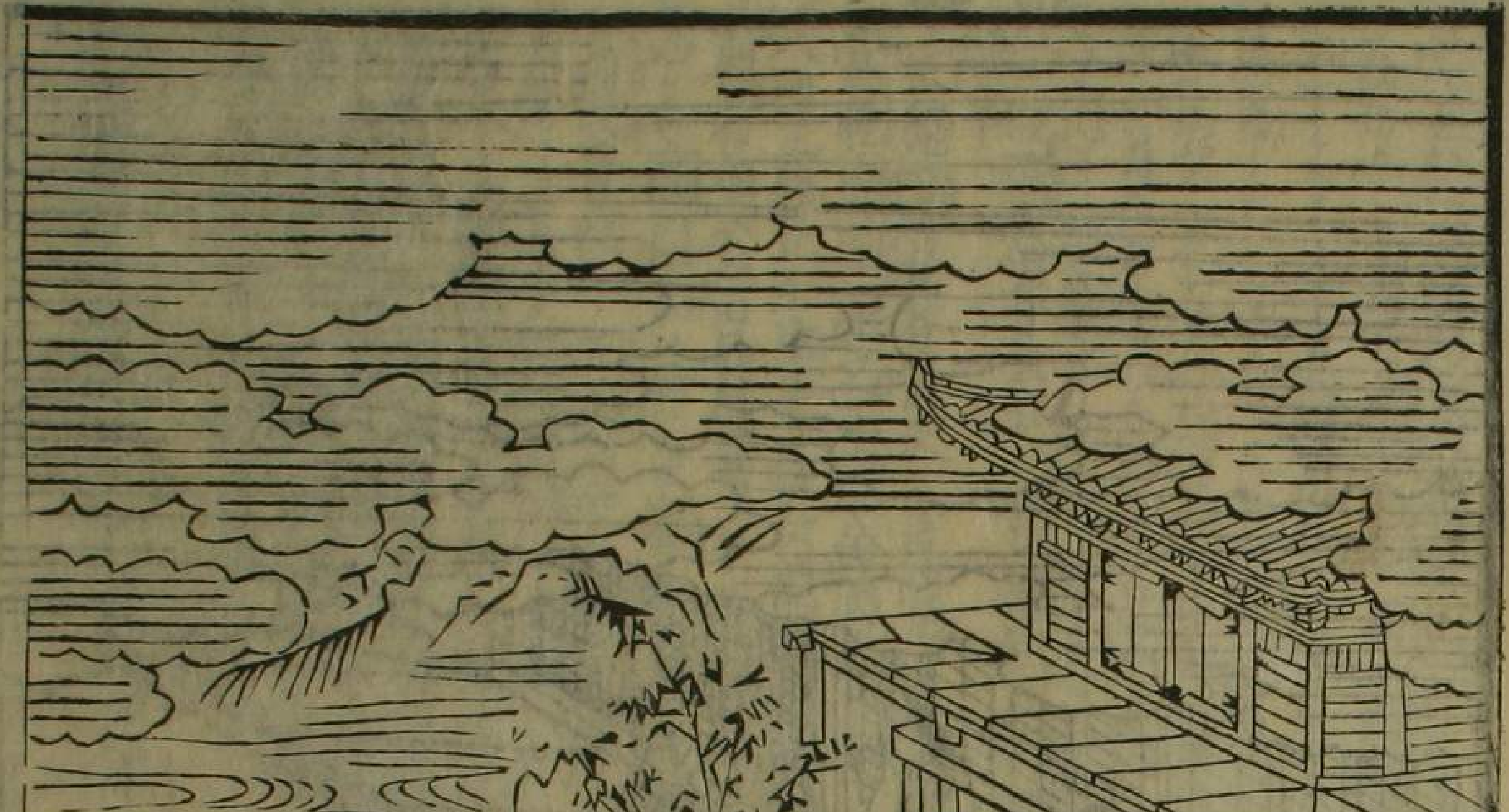
江師 鈔 大江匡房也太宰帥なる故に江師と云

匡衡　挙周　成衡　匡房 正二位権中納言 儒者

江次才に簇すし古書も皆匡房作くるの由いまて世よか[illegible]ちもあろ事もよぶ事をしてしわせうと江帥の字なりとよ云ふ[illegible]

西域傳 鈔 玄弉三藏天竺へ渡りての記録十二巻あり西域記と名づく

あまりやけ經をは小安
筆してとれ首楞嚴經を
編して那蘭陀寺と号を
その壁の中されハ那蘭
陀るハ天門ふむきとて江
師の説とそいひつたへされ
と西域傳法顕傳すとも
見え及定よ見ん示すハ江帥[illegible]



法顕伝 野 法顕三蔵天竺の記録之上書之
に見ゆる。
西明寺 野 唐にて法相宗の円測の居する
寺之。円測ハ窺基の弟子。窺基ハ玄奘の弟
子之。白氏文集にも西明寺牡丹の詩あり
さぎちやう 野 三毬打 三毬杖 爆竹 左義長
如此書やうあまたあり。顔昭補中抄ニ毬杖是
十五十節録黄帝取蚩尤頭毬之。今毬杖是
也。又彼例僕上年始用杵事。国中無凶事。仍日本
国学其例。年始打毬杖。然則毬杖王魁春之言
事文類聚 爆竹 神異経 西方深山中有人長尺
餘。犯之則病寒熱。名曰山臊。人以竹著火中爆烞有
声而山臊驚憚。 歳時記 爆竹燃草起於庭
燎。 右諸書を考ふるに爆竹ハ除夜と元日とに
ある事なり。上元よりあら上元ハ漢武帝の
たなひとを祭るよ時よりの事のあるまでおこ
なハせ事の始として燃燈の事あり。又天竺
にも正月十五日信徒あつまりて燈をともし
仏舎利を見たてまつる事あり。爆竹のるあまり日本の
さぎちやうハ仏家よりいひ伝ふるハ漢の明帝の時
始て天竺より仏法きたる。其頃の道士是を
破らんと訴ふるによりて是を見んとて
仏経を左にならべ道士の書を右にならべて

いつくる西域までわかされ
りん。法顕伝。唐土の西
明寺ハ小むき勿論さやき
さぎちやうハ正月よりはる
きちやうを。真言院より神
泉苑へ出して焼あるく。
法成就の池よりそとんや
是ハ神泉苑の池をいひ

次とかくるよ居士の書焼失せされい花の香
長せりと云て左義長と云又西域義長や東土へ
土やとくそやと西域佛法の香まさりて東土へ
流布せしと云事ともいへりそれい皆海内の
士庶する事るれい我居を焚るなり入制山脈
よ正月よあふるきちやうとあまれい袖中抄の説
によ同じ此義をよしとすべきなり
眞言院 野 拾芥云在勘解由使廳北御修法念
誦等
神泉苑 野 拾芥云天子遊覧所以近衛次将為別
當乾臨閣謂之正殿大宮西南大宮東
八町三條北壬生東善女龍王常見此所上代御
別者有公當長保年中道綱補之
こゆき 野 謝女ハ雪を塩よたとへ香山ハ雪を
玉屑よたとへ王逸ハ雪を豆稭灰よたとふる
ためしあまたい米粒よたとへたるなきも
あへし 愚明 爾雅雨霓為霄雪注云冰雪雑下謂
之霄雪説文霰稷雪也陸佃云闘俗謂之米雪
今名滴雪與霄相近粒雪初作未成花圓如稷粒
かきや木のすゑ 野 牆垣樹木の岐く
淡岐また日記 鈔 三条にあり

ふまくこ雪。だんそのこゆきといふ。よはつきふえるよ似られい。粉雪(こゆき)といふたまれこ雪といふべきをあやまりてたんそのといふるかぐ。きや木のすゑふゆうちえし。とある猶云り申き。昔よりいひふるしとうや。と鳥羽院(とばのゐん)おほせらくおりまし

六れ

て雪の降るにかく仰られける由。讃岐のすけの
日記に書たり

隆親 抄 四条隆季 隆房 隆衡 隆親 権大納言正二位 検校別当
からさけ 野 干鮭と書 和名云崔禹錫食経ニ云 鮏 折育反和名佐介 今案俗用鮭字 非也 鮏音圭○鯸鮧魚一名也 其子似苺而赤光 一名年魚春生年中死故名之 今按苺子即覆盆子也見唐韻ニ
凡魚を生ながらかわかしたるを淡魚とし 鱐魚とも云 乾にしたるを鮑魚とし法魚とも云 塩につけたるを醃魚 鮑魚 鱐魚と云 本草綱目にあり
鮭のしろぼし 野 東鑑第十 建久元年十月十三日 頼朝於遠江国菊河 佐々木三郎盛綱 相副小刀於鮭楚割 以子息小童 送進御宿 申云只今削之令食之處 気味頗懸切 早可賞翫云く 殊御自愛 彼折敷被除 御自筆 曰 ……
子さけもすそやりのよろしくてゆるこころ
さしうる
鮎のしろぼし 野 和名云鯰魚 一名鮎魚 和名安由 揚氏漢語

百八十二 四条大納言隆親卿から
さけと云物を供御に奉り
せられけるをかくあ
やしき物まゐるやうあらじ
と人の申けるを聞て大納言
鮭といふ魚まゐらぬ事

抄云銀口魚 春生冬死故名年魚 又云細鱗魚
宗廟を祭るに藁魚曰商祭 鮮魚曰脡祭と曲礼に
見えたり 鮎も生鮮をもちゐらるゝこと古
のためしなり 鱻とも鮎ともいふ
よしある魚なれば供御よまゐるべきものなり
本草綱目を見るに鮧魚は さけ 鱻魚は あゆと
云 今和名集にきこえたる鮭と鮎と世に久
しく出たる故にしばらく引用るなり

よてあらんよこそあれ。鮭の
白干し何条事かあらん。
鮎の白干はまゐらぬかは
と申されけり

是頃までも律の禁ありけり 野 曲礼 献鳥者佛其首 畜鳥者則勿佛也 佛戻也 謂捩轉其首 恐其啄人也 献車馬者執策綏 献甲者執冑 献杖者執末 ……
周書呂蔡 太保乃作旅獒 ……
律 厩牧曰 凡馬牛及犬 有觝蹋齧人 而記標 羈絆不如法 若有狂犬不殺者 笞四十 ……
標幟羈絆之法

百八十三 人觝く牛をば角をきり
人くふ馬をば耳をきりて
そのしるしとす。しるしをつけ
ずして人をやぶらせぬるは。

ぬしのとがく。公子ふたりをはやくあひ知べければ。是をみて
とがあり。律のいましめ也

時頼【鈔】関東の執権正五位下相模守　号最明寺　法名道崇くはしく東鑑に有り。秋書にあり【愚明】執の事ありしとは此世通家抄致にみえたり

相模守時頼の母は。松下禅
尼ときこえける。守をいれや

北条
平時政―義時―泰時―時氏―経時
　　　　　　　　　　　　　　時頼

松下禅尼【野】東鑑四十四建長六年十月六日相州室　禅尼子孫也。加持若宮僧正隆弁験有　清尊僧都也。奥州女房松下禅尼相州禅尼　群集安東左衛門尉光成奉行有り。布施物等銀剱五衣馬置鞍等

さることをまうすことにありけ
るあり。はなしのやうに
守をいれやさるゝ【鈔】禅尼へ招請ありて饗応せらるゝ

ならりとの事。義景【野】せうとは兄弟の禅尼と義景と兄弟也。秋田城介義景の事也【愚明】伊勢物語にせうとの堀川の大
臣と。禅尼のせうと
納言とかきたりしも此の俗に
りいめいといふ也【鈔】遊仙窟には姿娘とあり。案ずるに刀して。きり
絵管とまへ一条禅閤御抄巻にけいめいとあるを

六ノ七

【鈔】誤伝輔に致仕と書けり。やすきは泰時の事也。ならびに
義景の姪なるとし時のまへになれば。せうとの城介義
経柄ならぬよしやまりれるを【愚明】時頼は義景の姪なる
景。其日のけいめいしてはべりけり。男に
まかせはべらんや。そのさうじのなる者にはとやまされければ。
其男。尼の細工にまさり
はべらじとて。猶一間づゝ
はりなされけるを。義景みなを張かへはべらんは。はるかにたやすくは
べし。まだらにみえるも見ぐるしくやと。申されければ。
尼も後はさはさはと張かへんと思へども。けふばかりはわざ
抽はやぶれたる所【野】貞永式目加之小破之時且加修理とあるは泰時が此式目の趣を禅尼かやうのとがくて先祖の風を助
されしを見てかくあるへきとおのれの如此して
とかくそれへよくよく抽は破さ

頼よ譬へこあれく、倹約をもとゝす 野 論語子曰以約失之者鮮矣又曰奢則不孫倹則固与其不孫也寧固 注 何晏集解云去奢従約謂之倹

る所ハかりを修理して用る

ことゝぞわかき人ニ見ならハ

せて心づけんためなりと申されけるハいとありがたかりけり

世を治る道倹約を本とす女性なれども聖人の心に

かよへり天下をたもつ程の人を子にて持れける。

誠ニたゞ人にハあらざりけるとぞ

十五 「城陸奥守泰盛ハさうなき馬乗なりけるが引

出させけるにあしをそろへてしきみをゆらりとこゆる

しきみ 鈔 閾とも閫とも書り 野 是を怠まる人ハおそれおりよ事術を執るにかぎらさる事すになへし我人ゝ数を存するも又欲入屋架貴人揣摩筋盗といへるハ繇一の工夫あらずやよく数して事をおこなふにあやまちすくなかるへし故ニ先儒敬の字を釈するに畏の字を用る事此義なるべし

を見てハ是ハいさめる馬也。

とて鞍を置かへさせけり。

又あしをのべてしきミにけ

あてぬれハ是ハにぶくして

あやまちあるべしとてのら

ざりけり道をしらざらん

人かばかり怖れなんや